

『サー・トマス・モア』における二重性  
ー構造とキャラクターの重なりー

## はじめに

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の作品群の中でシェイクスピア自身が本当に執筆したのだろうか、という疑問が長年の間、取り上げられている作品が『サー・トマス・モア』(*Sir Thomas More*, 1592)<sup>1</sup>である。シェイクスピアも含めて5人の執筆者の作品であろう、とされるこの作品の先行研究は当然のことながら、シェイクスピアが本当に執筆に加わったのかというオーサーシップの研究が多くを占めており、作品の内容に触れたものは比較的少ない。人文主義者サー・トマス・モア (Sir Thomas More, 1478-1535) という実在の人物に取材したこの作品はオーサーシップという作品成立の性質だけを問題にするのには、魅力の大半を失っている、と筆者は考える。ここでは内容について論を進める事にしたい。

作品の主人公であるサー・トマス・モア (Sir Thomas More) は2つの顔を持っていると言える。つまり民衆の擁護者であり、労働者サイドの人間という顔と出世して国の側に立つようになる顔である。作品が進行するにつれて、モアが出世していく事を考えるならば、作品の構造も大きく分けて2つの部分に分けられると考えられる。2つの性質と言うのが作品の解釈で重要と考えられるのではないだろうか。

この2つの性質と言う作品の特徴に注目している3人の批評家を取り上げ、この2という数字が重要な考えであることを裏付けしたいと思う。ニーナ・レヴィーン (Nina Levine) は「この劇は集合的な不満から個人の良心と言う内面性に向かい、公から私の領域に動き、モアの達成を高める働きをしている」(“The play thus moves from collective grievance to the inwardness of individual conscience, from a public to a private sphere that works to heighten More’s achievement”)(39)とモアの置かれる立場の変化という2つの領域について述べている。また R・W・チェインバー

ズ (R. W. Chambers) は『サー・トマス・モア』と『ヘンリー 6 世』 (*Henry VI*, 1589) 中に使われる単語の同一性に基づき作者の同一性というオーサーシップを問題にしつつも内容に関して「この結びつきはユーモアと恐怖の混合された効果を生み、これはシェイクスピアとこのモアの場面を除き、エリザベス朝演劇の他にはほとんど見当たらない」 (“ The combination produces an effect of mingled humour and horror, quite unlike anything else in Elizabethan drama outside Shakespeare and this *More-scene* ”)(262) とし、副次的にユーモアと恐怖という 2 つの領域という点を述べている。

そして最後にアリステール・フォックス (Alistair Fox) はモアの最終の運命である処刑に至るまでにとった彼の態度について「王の法という正義と自然法の正義との間の葛藤は、したがって従順と義務という性質と関係性の問題に広げられる」 (“ The conflict between the justice of the king's law and the justice of natural law is thus enlarged into a question about the nature of, and relation between, obedience and duty ”)(167) とモア自身のとる態度の 2 つの領域を説明している。

このように先に述べた 2 つに分けられる作品の構造や 3 人の批評家が述べる 2 つの領域のようにこの作品は 2 つの性質が重要な特徴となっている。シェイクスピア劇を説明する言葉で「見かけと真実」 (“ appearance and reality ”) のようにやはり 2 つの性質を表すものがあるが、他のシェイクスピア作品と同じようにこの作品でも重要な性質となっていると筆者は考える。

本稿では第 1 節では金についてモアのとった行動の特徴を検討し、第 2 節では作品の重要な展開であるモア自身の死の意味を考える事とし、上に述べた 2 つの領域がテーマとしてどのように関わってくるかを明らかにしたいと思う。タイトルの人物名と関りがあるか等も明らかにできればと考える。

## 1. 制度と金への二面性

作品中でモアが最初に演じる役割は民衆による外国人排斥の暴動を抑え込むというものである。それはサリー(Surrey)が言うようにモアが「賢く博識な紳士である執政官の一人であり/市民に特に人気がある」(“ One of the sheriffs, a wise and learned gentleman, / And in especial favour with the people ”)(3.86-7)から出来た仕事である。力という圧力ではなく説得という穏やかな方法で行えたのは、まさにモアの人徳によるところが大きい。民衆の側に立っているモアの様子がわかるエピソードである。

しかし、民衆の側に立つモアであるが、同時に彼は執政官という公職にある以上、制度という枠組みの中に立つ人間でもある。この制度の枠組みをモアが破るエピソードが前半の下級階級のスリを助ける場面で示されている。スリにより死刑が決まっているリフター(Lifter)<sup>2</sup>に対して、判事の財布をすれ、という犯罪を促すモアである。「私を破滅させないでください」(“ seek not my overthrow ”)(2.61)と怖がるリフターへ機知で救い出すから大丈夫だと制度側の人間とは思えない態度をモアはとる。この提案の結果、リフターは判事の財布をする事になり、財布がなくなつたと声をあげる判事に対してモアは以下のように述べる。

More    Seven pounds odd money?    What, were you so mad,  
Being a wise man and a magistrate,  
To trust your pourse with such a liberal sum?  
Seven pounds odd money?    'Fore God, it is a shame  
With such a sum to tempt necessity.  
I promise ye, a man that goes abroad  
With an intent of truth, meeting such booty,  
May be provoked to that he never thought. [...]  
(2.167-74)

モア 7 ポンドもの金。何と愚かな。

賢い男で判事でありながら

そんな大金を財布に入れて安心しているとは。

7 ポンドもの金。神かけて残念です。

そんな大金で貧乏人を誘惑するとは。

私は強くこう思うのです。男が外出して、

しかも正直でありながらも、そんなお宝に出会ってしまえば、

考えもしないことを引き起こしてしまうものです。

[ … … ]

財布をすったスリが悪いのではなく、大金を持っていた判事に罪がある、とするモアは言う。判事自身も同じような事を財布を取られたと述べる原告の男に既に言う経験をしている。金を持つものを非難しておきながら、判事自身が非難されるべき立場に陥っている事をモアは機知により語る。結果的に下級階級のスリの男リフターの罪は許されてしまう。モアがリフターに判事の財布をするという犯罪をさせなければ、法の定めによりリフターは死刑になっていたのである。

このように制度の内にあるモアがスリをそそのかす、という制度を外れた行為をする元にあるのは、弱い人間への愛情であり、民衆サイドへの愛情である。執政官という公職の名誉よりも弱者への愛情を重視した結果と言える。作品の後半で出世して国の立場に立つモアは良心を忘れていないが、これはこうした前半で示される制度よりも良心を重視するモアから変わらず継続される特徴だと言える。この金に関するエピソードは後になってもモアを説明する要素として重要な事となってくる。

リフターによる財布をすするという盗みを許したモアであるが、作品の後半では盗みを許していない。モアの邸宅で、ロンドン市

長や市参事会員をもてなすために芝居を催したモアであるが、役者に与える給料を召使が誤魔化して自分のものにしようとする。モアはそれを許さず、以下のように述べる。

More    Am I a man by office truly ordained  
          Equally to divide true right his own,  
          And shall I have deceivers in my house?  
          Then what avails my bounty, when such servants  
          Deceive the poor of what the master gives?  
          Go one and pull his coat over his ears.  
          There are too many such.    Give them their right.  
          [ . . . ] (9.343-9)

モア    私は役職により真に命じられている男だ。  
          各自の当然の権利を平等に分ける事をだ。  
          私の家に詐欺師を置くべきだろうか。  
          私の心づけについて、そんな召使が  
          主人が貧しいものに与えたものを、騙し取ったらどう  
          なるのか。  
          その制服を頭から脱いで出ていけ。  
          こんなことが多すぎる。彼らに当然の権利を与えよ。  
          [ ... ... ]

金を盗むという点ではリフターによるスリと何ら変わる事がないはずなのに、モアは許さない。一体何が違うのだろうか。ここで作品序盤の市民の暴動に関して述べた批評を引用してみたいと思う。外国人という外側の存在の有害性が、この金についての議論にも当てはめられると思うからである。ジョーン・フィッツパトリック (Joan Fitzpatrick) は「有害な消費は『サー・トマス・モア』において外国人の影響の強力なシンボルとなっており、人間の本

質的な行動である食べる事が、外国人の場合は不自然とされているのは、驚くべきことではない」(“Pernicious consumption is a powerful symbol of foreign influence in *Sir Thomas More* and it is not surprising that eating, an essential human behavior, should be made to seem unnatural in the case of foreigners”)(35)と述べ、外国人という外側の悪影響と消費のイメージについて説明している。

上のモアの台詞で「私の心づけ」と「当然の権利を平等に分ける事」は同じ意味で使われているが、この行為の元になっているのはモア自身の役職である。役職により命じられているモア自身の仕事は、召使の誤魔化しにより汚され価値を失う。金を誤魔化した召使は、モアにとって自分とは同じ領域に置くべきではない外側の人間である。外側の人間の有害性と役職とその仕事を蝕む「食」のイメージは、フィッツパトリックが説明する外国人の食べる行動と似たような意味と考えられる。金を誤魔化した召使は、モアと同じ立場ではない外側の人間であり、実際に彼は召使を解雇するという手段によって、自分の家から追放し、物理的にも外側に追いやる。

リフターのスリについては、モア自身が金の盗みをそそのかし、犯罪の共犯になる事で、立場が同じになる。つまりスリという盗みを許す場合には、モア自身と同じ領域、外側ではなく内側にリフターはなっているから、金の誤魔化しが許される。そしてこの場合、執政官という役職には相応しくないスリの共犯をモアは行い、召使の断罪の場合とは違って役職は軽視される。これが金を盗むという同じ行動に対しての、モアの全く違った反応である<sup>3</sup>。

モアは作品の終盤で処刑される寸前に、大法官である自分が「地位の名誉のために、財産がもっとあればよかった」(“For credit of the place, that my estate were better”)(16.48)と述べているように、役職に対して軽視はしていない。ところが、役職に対してモアは上で説明したように前半と後半では矛盾を示している。

どちらも良心が軸になっているかもしれないが、役職への態度と金への反応は矛盾が見られる。モアを説明する要素として、金と役職の反応の矛盾は興味深い。この意味でもモアの態度から、作品の2つの領域というイメージは明らかである。

## 2. モアの処刑の意味

大法官に出世したにもかかわらずモアは、国王の求める文書への署名を拒絶したためにロンドン塔へ幽閉され、処刑される事になる。劇中でこの文書が何であるかは、明らかにされていないが、おそらくは国王ヘンリー8世とキャサリン妃の離婚を認める文書であり、それに異を唱えるモアというのが、歴史的な事実から推測される。自らの信念により死を選ぶモアである。この信念を貫き、国王の権力に屈しないモアは、通常高潔な人物として考えられる。ロンドン塔への幽閉の状況でいよいよ処刑される時にも「私はあなた方の縛りを抜け出し、天国へと飛翔するのです」(“I shall break from you and fly up to heaven”)(17.113)と魂の浄化、そして自身の行動の正当性を恐れることなく語っている<sup>4</sup>。首切り役人がモアを連れ去る時の最後の台詞をここで引用してみる。

More    Then to the east.

We go to sigh; that o’ver, to sleep in rest.

Here More forsakes all mirth.    Good reason why:

The fool of flesh must, with her frail life, die.

No eye salute my trunk with a sad tear.

Our birth to heaven should be thus: void of fear.

(17. 119-24)

モア    では東へ。

我々は嘆くものだ。それが終われば永遠の眠りにつく。



ここでモアは全ての冗談を捨てる。そうする十分な理由とは、

肉体の道化師は、はかない命と共に死ぬからだ。

私の頭のない死体を悲しみの涙で見送らないでくれ。

天での我々の生誕はこうなのだから。つまり恐れが全くない。

自分の死が天国での安らぎに続くものである、と語るモアである。死んだ肉体は天国での魂の生誕を生むという、信仰心の深さを示しているモアが分かる<sup>5</sup>。自らの信念は信仰と深く結びついているのが分かる

カール・P・ウェンターズdorf (Karl P. Wentersdorf) はシェイクスピア劇全体の特徴から「破壊的な水のイメージはシェイクスピアのお気に入り、政治的、社会的、道徳的領域の秩序を冒す場合で使われる」(“The image of destructive waters is a favorite with Shakespeare, used in situations involving a violation of order whether in the political, social, or moral spheres”)(184)と述べ、序盤の市民の暴動と洪水の関連性に言及している。この水のイメージは涙という水分にも広げて考えられる。

処刑されるまで信念を変えないモアに、妻や嫁、息子はロンドン塔内で顔を合わせることになる。妻たちの流す涙は、モアの信念と信仰を手助けするものではなく、反対するものになっている<sup>6</sup>。悲しいから泣くのは当然かもしれないが、妻による私たちを思ってもう信念を曲げてください、という言葉は、モアが言う自分の代わりに神が未亡人と孤児の父親になるから大丈夫、自分よりも安全に守る力があるから大丈夫、という言葉と反対の言葉である。悲しみの方がモアの示す信仰心や信念よりも大きくなってしまい、結果的にモアの高潔性は理解されている、とは言えない。息子もその妻も、モアの妻も最後までモアが信念を曲げて国の見解に屈する事を嘆願している。涙という水は、モアの信念や信仰

心、高潔性というウェンターズドーフの言葉を借りるならば「道徳的領域の秩序」を侵すものとなっている。モア自身が述べる自分の頭のない死体を悲しみの涙で見送らないでくれ、という言葉にも涙という水分が否定的な意味で使われているのが分かるであろう。モアの信念、信仰心による死は、彼の高潔さを証明するものであるが、十分に理解されたうえでの死とは、必ずしも言えない。

信念と信仰心によるモアの死の高潔性は疑いようがない。しかし、このように身内からは必ずしも理解された死とは言えない、という事を示した。死には高潔さとは逆のマイナスの要素があるのではないか、と予想できる。モアの死によって直接影響を受けているのは親族だけでなく、モアの仕事に関わる人物も含まれる。ロンドン塔に幽閉される直前、塔の前でモアの側の看守に話しかける女の台詞をここで引用してみる。女は「私は貧しい女で神もご存じですが/2年の間大法院へ訴訟を起こしていました/あの方はこの件の証拠を持っています/もし失くしたら全くもとに戻ってしまいます」(“ I am a poor woman, and have had, God knows, / A suit this two year in the Chancery, / And he hath all the evidence I have, / Which should I lose I am utterly undone ”)(14.23-6)とモアに何とか話しかけようとする。モアの手がけていた訴訟の当事者の女だったわけである。自分の権利に関する書類を返していただけますか、と願う女に対してモアは以下のような返事をしている。

More    What, my old client, are thou got hither too?

Poor silly wretch, I must confess indeed

I had such writings as concern thee near,

But the King

Has ta'en the matter into his own hand;

He has all I had.    Then, woman, sue to him.

I cannot help thee. Thou must bear with me.  
(14. 36-42)

モア おお、昔の依頼人、あなたもここへ来たのか。  
哀れな人よ、私は正直に言わねばならないが、  
あなたに関する書類を持っていた  
しかし、王が  
その書類を自分の手の中へ取り上げ、  
私が持っていたものを自分のものにした。だから女よ  
王に訴えよ。  
私はもうあなた助けられない。あなたも私と共に耐えるのだ。

モアが手掛けていた女の訴訟案件は王の仕事へと変わったのである。モア自身は民衆を忘れずに、実際に女はこうしてモアに話しかける事が出来ている。果たして女は今後、王に権利を訴え、お願いする事が可能なのだろうか。私には王の意志に逆らうからといってモアを処刑する人間に、民衆の立場を理解する事が出来て、貧しいこの女を救う事が出来るとは到底思えない。モアの人徳は随所に作品中で証拠が見出されるが、王の人徳を作品中に探すのはとても困難である。庶民を忘れないモアが行っていた仕事を、それを引き継いだ王が同じように行い、哀れな女は救われる、とは考えられない。モアによる死は、救えるはずの女の状況を危うくし、貧しい人間の味方にはもうなれない、という結果をうんでしまう。モアの死のマイナス要素ははっきりしている。

モアが王の命令を拒絶し、死ぬ事について述べているスザンナ・ブリエッツ・モンタ(Susannah Brietz Monta)は「モアの曖昧な特徴は彼を称賛とユーモアのセンスの人間として称える一方、モアが王に従うのを拒む事については賞賛すべき事なのか愚かな事なのかは、判断できない」(“Its ambiguous characterization of More

seems to praise him for his wisdom and sense of humor, while reserving judgement on whether More's refusal to submit to his king was admirable or foolish")(111)と言っているように、彼の行動は正しいかもしれないが愚かな行為、あるいは愚かながらも正しい行為として、プラスとマイナスの両方の面を持つものである。完全に正しいとは言えない行為である。死の意味に矛盾が存在しているのは明らかであろう。モアの金と役職への態度と同じような二面性が見受けられる。

## 結 論

第1節では金と役職についてモアの態度には矛盾があり、時には軽視し、時には重視するという事を明らかにした。また第2節では高潔と考えられるモア自身が選ぶ死の意味は、プラス面とマイナス面の二面性がある、という事を示した。本稿の最初でこの作品はモアが民衆の側に立っている部分と出世して国の側に立つ部分の2つに分けることが出来て、2つの構造が重要な考えである、という予想をだした。シェイクスピア演劇の「見かけと現実」という主要な特徴も2つの要素から成り立つものである。第1節で示した金と役職に対しての矛盾も第2節で示した死の意味の二面性もこの作品の2つの構造と同じく、二重性の特徴が表されている。

本稿の問はこの二重性、2つの領域がテーマとしてどのように関わってくるかを明らかにする事であった。モアのとった金と役職への態度の矛盾と彼の死の意味によって、作品の展開の2つの領域と重なっているのは明らかであるが、作品のテーマはやはり主要人物であるモアと関係がある、と私は考える。

ウィリアム・H・マチェット(William H. Matchett)は「シェイクスピアはキャラクターの完成を解決しない矛盾を描く事によって成し遂げた」(“Shakespeare learned to achieve fullness of

character through unsolved contradictions ”)(221)と述べているが、これはこの作品のテーマを考える上で重要な指摘と思える。モアは客であるエラスムス(Erasmus)を楽しませるために第3幕第1場で、自分の身代わりを他の者にさせてエラスムスをだまそうという冗談を仕掛ける。聖人として考えられるモアにはおどけというユーモアがあり、堅苦しい人格者という説明だけでは不十分である。信念を曲げずに死を選ぶモアは、ユーモアも同時に併せ持つ人物と言える。モアがエラスムスに語る「どれほどの尊敬が / 外見だけ立派な者で / 無教養な者に払われ、他方で学のある者が / 貧しさの衣をまとい阿呆と思われているだろうか」(“ how far respect / Waits often on the ceremonious train / Of base illiterate wealth, whilst men of schools, / Shrouded in poverty, are counted fools ”)(8.181-5)という台詞も知性で見かけという二面性の2つの領域を示すものであるが、この発言こそ作品のテーマと関わり、モアを説明する言葉なのである。作品中で示される様々な矛盾という二面性は、モアの人物を表す現象として考えられる。つまり、矛盾した2つの特徴を持てる事こそ、モアが聖人である所以だというものである。モアが演じるおどけは実際にエラスムスを喜ばせるという結果を生む。聖人としてのモアの厳格さとおどけというユーモアの融合は、エラスムスにとって喜ばしいものであり、2つの反対する知性をモアは見事に併せ持っている。反対の知性を処理する結果が喜びを生む。人の喜びを生むというのは、聖人の特徴として十分である。このエピソードに表されている作品全体の矛盾や二面性は、モアが成功している相反する2つの知性を同時に持つ、という聖人である理由として大いに関係がある<sup>7</sup>。この作品のテーマは、矛盾や二面性という作品の構造が相反する2つの知性を同時に持つモアの性格と重なり、彼が聖人である理由を表すものだ、という事である。作品の状況や設定がモアの人物を表すものとして表現されていると言える。モア自身の矛盾は柔軟な人文主義者の性格を裏付けるものだ、とい

うの分かる。

シェイクスピアの示した「見かけと真実」の二重性の矛盾は、否定的な意味で使われる事が多いが、反対する事を同時に処理できる人物という文脈なら肯定的な意味で使える。現代を生きる我々にとっても矛盾の日常をいかにうまく処理できるか、というのが人生をうまく生きていくうえで重要なのではないだろうか。

## 註

1. 以下、ウィリアム・シェイクスピア『サー・トマス・モア』からの引用は、William Shakespeare, *Sir Thomas More*, Ed. John Jowett, Bloomsbury(2011)の版に拠る。
2. 名前が暗示する lift には「巻き上げる」、「盗む」の意味があり、名前とスリの行為が一致している。
3. リフターのスリを認めて命を救う場合も、召使の誤魔化しを断罪して追放する場合も、金に道徳的価値をモアは与えているのは明らかである。
4. 自分が役職を失い罪人となる階級の下降に対して、魂の天への上昇という反対の性格がここでは表現されている。ここで言う「縛り」は文字通りのロンドン塔内への拘束のみならず、この世での一切のしがらみや葛藤を表す。死によってこの世での苦しみから解放されるモア自身を表している。
5. 天国での新しい命は、英知や春、世界の光であるキリストの出現などを連想させる。引用の東の方向は、日の出を表すものであり、死者が天国での永遠の命を得るための最初として考えられる。身体においては、東が右で西が左である。左半身が不吉である、という考え方は東西を問わず、見受けられる思想である。
6. 涙は時に豊饒さというプラスの意味をもたらす。神々の涙は雨である。また洗礼を受ける際の赤ん坊の涙は必要なものとされ、神聖な意味を持つ。しかし、ここでの涙は論旨から「弱さ」を表すものとする。
7. アメリカ文学の F・スコット・フィッツジェラルドは一流であるかどうかの試金石は矛盾するものを同時に処理できるかどうかである、という考え方を持っている。金への愛憎両方を持っているフィッツジェラルドとこの作品でのモアの金への矛盾する反応が部分的に重なるようで興味深い。

引用 · 参考文献

- Chambers, R. W. "Some Sequences of Thought in Shakespeare and in the 147 Lines of "Sir Thomas More". " *The Modern Language Review* , Jul., 1931, Vol. 26, No. 3 (Jul., 1931), <https://www.jstor.org/stable/3715854>, pp. 251-80.
- Chillington, Carol A. . " Playwrights at Work: Henslowe's, Not Shakespeare's, *Book of Sir Thomas More*. " *English Literary Renaissance* , Autumn 1980, Vol. 10, No. 3, TENTH ANNIVERSARY — ISSUE THREE: Studies in Shakespeare (Autumn 1980), <https://www.jstor.org/stable/43446998>, pp. 439-79.
- Fitzpatrick, Joan. " Food and Foreignness in "Sir Thomas More. " *Early Theatre* , 2004, Vol. 7, No. 2 (2004), <https://www.jstor.org/stable/43499227>, pp. 33-47.
- Fox, Alistair. " The Paradoxical Design of "The Book of Sir Thomas More." *Renaissance and Reformation / Renaissance et Réforme* , 1981, New Series / Nouvelle Série, Vol. 5, No. 3 (1981), <https://www.jstor.org/stable/43444328>, pp. 162-73.
- Green, Alexander. " The Apocryphal Sir Thomas More and the Shakespeare Holograph. " *The American Journal of Philology* , 1918, Vol. 39, No. 3 (1918), <https://www.jstor.org/stable/288948>, pp. 229-67.
- Kincaid, Noel. " The Dramatic Structure of Sir Thomas More's History of King Richard II. " *Studies in English Literature, 1500-1900* , Spring, 1972, Vol. 12, No. 2, Elizabethan and Jacobean Drama (Spring, 1972), <https://www.jstor.org/stable/449891>, pp. 223-42.
- Levine, Nina. " Citizens' Games: Differentiating Collaboration



and "Sir Thomas More. " *Shakespeare Quarterly* , Spring, 2007, Vol. 58, No. 1 (Spring, 2007), <https://www.jstor.org/stable/4624955>, pp. 31-64.

Matchett, William H. . " Shylock, Iago, and Sir Thomas More: With Some Further Discussion of Shakespeare's Imagination. " *PMLA* , Mar., 1977, Vol. 92, No. 2 (Mar., 1977), : <https://www.jstor.org/stable/461942>, pp. 217-30.

Monta, Susannah Brietz. " "The Book of Sir Thomas More" and Laughter of the Heart. " *The Sixteenth Century Journal* , Spring, 2003, Vol. 34, No. 1 (Spring, 2003), <https://www.jstor.org/stable/20061315>, pp. 107-21.

Ramsey, Paul. " Shakespeare and "Sir Thomas More" Revisited: or, A Mounty on the Trail. " *The Papers of the Bibliographical Society of America* , Third Quarter, 1976, Vol. 70, No. 3 (Third Quarter, 1976), <https://www.jstor.org/stable/24302164>, pp. 333-46.

Shakespeare, William. *Sir Thomas More*. Ed. John Jowett, Bloomsbury, 2011.

Smith, M. W. A. . " Shakespeare, Stylometry and "Sir Thomas More". " *Studies in Philology* , Autumn, 1992, Vol. 89, No. 4 (Autumn, 1992), <https://www.jstor.org/stable/4174435>, pp. 434-44.

Wentersdorf, Karl P. . " On "Momtanish Inhumanity" in "Sir Thomas More". " *Studies in Philology* , Spring, 2006, Vol. 103, No. 2 (Spring, 2006), <https://www.jstor.org/stable/4174845>, pp. 178-85.